

# 中年期における親の介護と感情労働についての考察

小林 由佳<sup>1)</sup>・長津 美代子<sup>2)</sup>

1) 群馬県立万場高等学校

2) 群馬大学教育学部家政教育講座

(2012年9月26日受理)

## A Study on Caring and Emotional Labor to Their Parent in Middle-Aged Stage

Yuka KOBAYASHI<sup>1)</sup>, Miyoko NAGATSU<sup>2)</sup>

1) Manba High School, Gunma Prefecture

2) Department of Home Economics, faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 26th, 2012)

### 1. 研究目的

現在、要介護者の多くは、在宅で訪問介護やデイサービスなどの居宅サービスを利用しながら生活している。国民生活基礎調査(2010)によると、介護の主な担い手は約6割が同居している家族である。また、要介護者と同居している主な介護者の男女ともに約7割の者が、家族の病気や介護に悩みやストレスを抱えている。このような現状から、在宅で介護を行っている介護者を対象とし、在宅介護のあり方を考えていくことは、介護の充実を目指す上で重要である。

そこで、1980年代頃から新たな概念として注目されている「感情労働」に焦点を当てる。これまでの産業化社会の主な労働概念は、肉体労働や頭脳労働が中心であった。しかし、脱産業化傾向が強まった現代社会では、対人サービスの中で感情を管理することが必要となり、「感情労働」という新たな労働概念が生まれた。「感情労働」は、米国の社会学者A.R. ホックシールド(1983)によって提唱され、「相手の中に適切な精神状態を作り出すために、自分の感情を促進させたり、抑制しながら、自分の外見(表情

や身体的表現)を維持することを要求する労働である」と定義されている。

従来、感情労働はサービスを提供する有償労働における概念として使われてきた。しかし、近年ではマルクス主義フェミニズムにおいて「家事労働」という概念が発見されたように、家庭における無償労働においても労働の価値を有するという認識が高まっており、無償労働である家族間の在宅介護においても感情労働の概念が当てはまるのではないかと考える。

本研究では、次の2点を研究目的とする。①先行研究より、家族間介護における感情労働の特徴を明らかにし、家族間介護に適用可能な感情労働評価尺度を作成する。②計量調査により、家族間介護における感情労働をいくつかに分類し、それぞれの感情労働に影響する要因を明らかにする。

### 2. 先行研究

#### (1) 感情労働の定義と特徴

ホックシールド(1983)は、感情労働が求められる職業として、客室乗務員や集金人を中心に提示し

たが、他にも感情労働が求められる職業は多数存在するとし、その特徴を3つ示した。

- ①対面的あるいは声による顧客との接触が不可欠である。
- ②従事者は、他人の中に何らかの感情変化を起ささせなければならない。
- ③雇用者は、研修や管理体制を通じて労働者の感情活動のある程度支配する。

ホックシールドは、感情労働を行うことによって、自然な自己の感情が抑圧され、本当の自己感情を見失い、自己疎外を生むというネガティブな面を指摘している。しかし、その後の研究で、ネガティブな面だけでなく感情労働のポジティブな面も存在し、労働者は進んで感情労働を行うこともあるという指摘がされている（長谷川 2007）。

## (2) 介護職における感情労働について

ホックシールドが提示した感情労働職の3つの特徴に、介護職が該当するかを検討した研究には、三橋（2006）があげられる。第1条件の「顧客との直接的接触」については、生活援助や身体介護、相談援助は利用者と直接的に対面して行うため、条件を満たしている。第2条件の「顧客の感情を操作する」については、介護職では自分の感情を管理することで利用者の感情を喚起させ、意欲ややる気をもたせるといった感情操作をしようとする側面をもつ。このため、第2条件も満たしている。最後に第3条件の「組織的管理体制の有無」である。介護福祉組織では感情管理技術に関するマニュアルや研修制度、評価制度などが明確には作成されていない。しかし、介護職には「受容・共感」などといった独自の感情規則が存在し、養成校や先輩や同僚との交流によって介護職に教示・指示されている。また、適切な感情管理の重要性は、管理者や職場においても認識されており、それが介護職に期待されている。このようなことから、三橋は介護職にも感情管理体制は存在すると言え、介護職は感情労働として扱うことができる」と論じている。

## (3) 介護における「職業的感情労働」と「家族的感情労働」の特徴の比較

介護職など職業としての感情労働を「職業的感情労働」、家族間介護など無償労働としての感情労働を「家族的感情労働」と表し、両者の特徴を対象者、賃金、価値、介護時間、感情規則、ホックシールドが示した感情労働職の3つの特徴（①直接接触、②感情操作、③組織的感情管理体制）の観点から、先行研究をもとに比較し、まとめた（表1）。

対象者については、職業的感情労働ではサービスを利用する利用者であり、他人であるが、家族的感情労働では父母や配偶者をはじめとする家族であるという点が異なる。

賃金については、職業的感情労働は有償であり、家族的感情労働は無償である。

価値については、職業的感情労働は使用価値を持ち、それが賃金と交換されるため交換価値を有する。一方、家族的感情労働は使用価値のみを有し、賃金と交換されないため交換価値はない（ホックシールド 1983）。

介護時間については、職業的感情労働では、労働時間が定められているため、限られた時間内に様々な活動を行わなければならない。一方、家族的感情労働では、職業労働のように時間が定められていないが、「自分の時間が3時間ぐらいとれるだけで、あとはほとんど介護に時間を費やす」「昼夜なく介護によって時間を制限されることが一番のストレス」など、ケアが長時間に及ぶことのマイナス面がある（長津・小林 2011）。

感情規則については、職業的感情労働では、「利用者の精神状態の安定を目指したり信頼関係の構築を図るために、相手がどのような状態であろうとも、援助者としてある特定の心的状態を維持すべきである」という規則や、「思いやりと優しさ」「明るく親切的な態度」「受容・共感」などといった理念が養成校や先輩、同僚から教示・指示されている（長谷川 2008、三橋 2006）。一方、家族的感情労働では、「気持ち良くいられるように」「怒らせないように」と要介護者の精神状態の安定を目指したり、「束縛されて嫌だという気持ちをもたないように」など、援助者

表1 介護における職業的感情労働と家族的感情労働の特徴の比較

	職業的感情労働	家族的感情労働
対象者	利用者（他人）	家族（父母、義父母、祖父母、配偶者など）
賃金	あり＝有償労働	なし＝無償労働
価値	使用価値と交換価値	使用価値
介護時間	限られた時間内に様々な活動を行わなければならない	<ul style="list-style-type: none"> <li>定められた時間はない</li> <li>「ほとんど介護に時間を費やす」「時間を制限されることが一番ストレス」など介護が長時間に及ぶことのマイナス面がある</li> </ul>
感情規則	<ul style="list-style-type: none"> <li>利用者の精神状態の安定を目指したり信頼関係の構築を図るために、相手がどのような状態であろうとも、援助者としてある特定の心的状態を維持すべきだという規則がある</li> <li>「思いやりと優しさ」「明るく親切な態度」「受容・共感」という理念が存在している</li> <li>以上が養成校や先輩、同僚より教示・指示される</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「気持ち良くいられるように」「怒らせないように」と要介護者の精神状態の安定を目指したり、「束縛されて嫌だという気持ちをもたないように」など、援助者としての好ましい心的状態を保つように期待されている</li> </ul>
①直接接触	あり（身体介護、生活援助など）	あり（身体介護、生活援助など）
②感情操作	自分の感情を管理することで利用者の感情や行動を操作しようとする側面をもつ	自分の感情を管理することで要介護者の感情や行動を操作しようとする側面をもつ
③組織的感情管理体制	あり（組織、労働者、利用者の三者を含むもの）	<ul style="list-style-type: none"> <li>親族からの干渉や評価</li> <li>介護者と要介護者の間に介在する人々</li> </ul>

として好ましい心的状態を保つように期待されている（長津・小林 2011）。

直接接触については、職業的感情労働においても家族的感情労働においても、身体介護や生活援助などを通してともに行われている。

感情操作については、職業的感情労働では、自分の感情を管理することで利用者の感情や行動を操作しようとする側面をもつ（長谷川 2008）。家族的感情労働においても同様の側面があるといえる。

組織的感情管理体制については、職業的感情労働は組織、労働者、利用者の3者によって成り立っている（三橋 2006）。一方、家族的感情労働では組織による管理体制はないが、親族による干渉や評価及び介護者と要介護者の間に介在する人々によって、一種の管理体制に似た状態がつくられているともいえる。

ホックシールドが示した3つの特徴は家族間介護においてもほぼ該当することから、家族的感情労働の概念が使用可能であると考えられる。

### 3. 家族間介護に適用可能な感情労働の尺度化

職業的感情労働の尺度化については、看護師を対象とした片山ら（2005）の研究とホームヘルパーを対象とした田中（2005）の研究があげられる。

これらの先行研究を参考に、長津・小林（2011）が試験的に作成した家族間介護に適用可能な感情労働評価項目を再検討し、3分類15項目から成る感情労働評価を作成した（表2）。分類は、「感情理解」（自分や要介護者の感情や立場をよく理解して介護を行うことができる）、「対応能力」（要介護者と良い関係を築き、その場に適切な対応ができる）、「感情管理」（マイナスの感情を抑制し、適切な感情を維持することができる）から成る。

### 4. 調査の枠組

本研究では、感情労働の内実および感情労働に影響する要因を分析するために、次の研究枠組を設定

表2 感情労働評価尺度

感情理解	①介護対象者の性格を理解している ②介護対象者の過去の社会的立場や人間関係を理解している ③介護対象者の気持ちの変化を敏感に感じ取ることができる ④介護対象者の視点で物事を考える ⑤介護者としての自分の長所や短所についてよく理解している
対応能力	⑥介護対象者が気持ちよく過ごすための工夫をしている ⑦介護対象者との間に対立や問題が起こっても対処することができる ⑧言葉ではっきり言われなくても介護対象者のニーズを探り出すことができる ⑨介護対象者のやる気を引き出すことができる
感情管理	⑩状況によっては自分の感情を抑えることができる ⑪介護対象者の前では怒りやつらさなどの否定的な感情を隠す ⑫いらいらしていても、心が穏やかであるふりをする ⑬心に感じていることとの違いを自覚しながら感情を表す ⑭落ち込んでうまく立ち直ることができる ⑮ストレスの多い状況でもやる気を失わずに居る

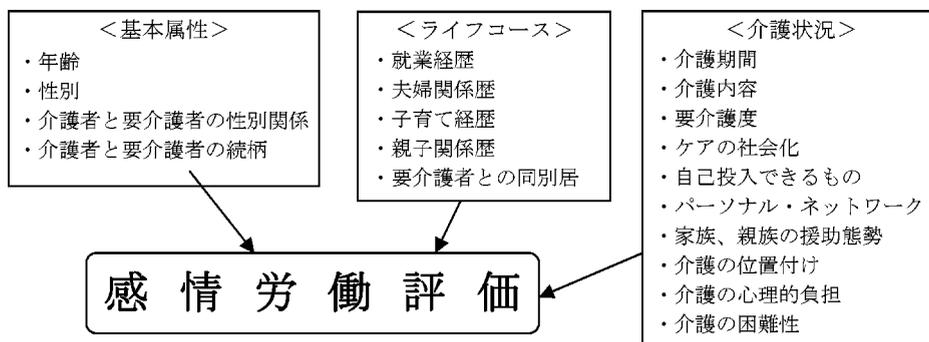


図1 計量調査の研究枠組

した。独立変数として、基本属性（年齢、性別、介護者と要介護者の性別関係、介護者と要介護者の続柄）、ライフコース（就業経歴、夫婦関係歴、子育て経歴、親子関係歴、要介護者との同別居）、介護状況（介護期間、介護内容、要介護度、ケアの社会化、自己投入できるもの、パーソナル・ネットワーク、家族・親族の援助態勢、介護の位置付け、介護の心理的負担、介護の困難性）などを考えた（図1）。

## 5. 調査の概要

調査対象は、2006年に前橋市および高崎市の選挙人名簿より無作為に抽出した夫婦1,500組（3,000名）のうち、有効票となった797名に3名を加えた中年期の男女800名である。

調査方法は郵送による質問紙法で、調査時期は2010年11月中旬～12月上旬である。

配布数800票のうち住所不明や健在しないとして19票が返却されてきた。回収数は623票で（回収率77.9%）であったが、回答不十分の無効票6票を除く617票（有効回収率77.1%）が有効であった。

対象者は、女性329名（53.3%）、男性288名（46.7%）であり、やや女性の方が多い。女性の年齢は58～69歳で、平均年齢は63.1歳である。男性の年齢は50～77歳で、平均年齢は66.1歳である。

## 6. 分析結果

### (1) 親の介護経験の有無と続柄

#### ①親の介護に関わった経験

親の介護に関わった経験がある者は、女性 66.6%、男性 37.5%で、男性より女性の方が多。男性の 62.5%は、介護に関わった経験がない (表 3)。

表 3 親の介護に関わった経験 (%)

	ある	ない	計
女性	66.6	33.4	100 (329)
男性	37.5	62.5	100 (288)
全体	53.0	47.0	100 (617)

#### ②続柄

親の介護経験がある者のうち要介護者の続柄については、女性の場合、自分の母という割合が最も多く (57.8%)、以下配偶者の母 (53.4%)、自分の父 (44.8%)、配偶者の父 (33.6%) の順である。男性の場合、自分の母が圧倒的に多く (73.9%)、以下自分の父 (53.9%)、配偶者の母 (16.5%)、配偶者の父 (12.2%) の順である。男性が配偶者の父母の介護に関わることは少ない (表 4)。

表 4 要介護者との続柄 (複数回答, %)

	自分の父	自分の母	配偶者の父	配偶者の母
女性	44.8	57.8	33.6	53.4
男性	53.9	73.9	12.2	16.5
全体	47.8	63.1	26.5	41.2

n : 女性 219 名 男性 108 名

### (2) 親の介護経験がある者の分析

複数の介護経験がある場合は、最も深く関わった要介護者のことについて回答してもらった。

#### ①因子分析

感情労働評価の 15 項目の選択肢「当てはまる」に 4 点、「少し当てはまる」に 3 点、「あまり当てはまらない」に 2 点、「当てはまらない」に 1 点を配点し、因子分析 (主成分分析・バリマックス法) を行った。

その結果、3 つの因子が抽出された。3 因子の累積寄与率は 60.50%。それぞれの因子負荷の高い項目群の内容から、第 1 因子を「理解対応」(自分や要介護者の感情や立場をよく理解して要介護者と良い関係を築き、その場に適切な対応ができる)、第 2 因子を「プラスの感情維持」(やる気を失わないなど、プラスの感情を維持して介護ができる)、第 3 因子を「マイナスの感情抑圧」(マイナスの感情を抑制して、穏やかな気持ちで介護ができる) と命名した (表 5)。

因子分析の結果から得られた 3 つの因子について、内的一貫性を確認するために Chronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、第 1 因子では.893、第 2 因子では.738、第 3 因子では.664 となった。第 1 因子と第 2 因子は十分な内的一貫性があり、下位尺度として利用できる。第 3 因子は  $\alpha$  係数がやや低いが、3 項目とも否定感情の抑圧を内容としたものであることから、第 3 因子の内的一貫性は許容範囲内であると思われ、分析に含めることにした (表 5)。

感情労働評価 15 項目それぞれの因子の合計得点を、理解対応得点、プラスの感情維持得点、マイナスの感情抑圧得点と呼ぶことにする。

#### ②重回帰分析

3 つの感情労働評価得点を従属変数として、基本属性・介護への関与状況・援助態勢と周囲の状況・介護状況の各変数群を独立変数 (17 変数) として投入し、重回帰分析を行った。重回帰分析は、他の変数の影響を取り除いた時の個々の変数の影響力の強さを明らかにする分析である。変数の内訳は表 6 の通りである。重回帰分析に先立って、17 変数の相関分析を行ったが、強い相関を示す変数は確認されなかった。

重回帰分析の結果は、表 7 に示す。いずれの感情労働評価得点も多重共線性の診断 (許容度と VIF) によって、分析結果に問題はないと判断された。

理解対応得点については、「関与の仕方」、「身体の清拭」、「別居の親族のパーソナル・ネットワーク数」、「ものの考え方を柔軟にしてくれる」で有意な影響力が確認された。補助的よりも主に介護に関わった方が、身体の清拭を行った方が、別居親族のパーソ

表5 感情労働評価項目の因子分析結果

項目	F1	因子負荷量			共通性
		F2	F3		
理解対応 ( $\alpha = .893$ )	①介護対象者の性格を理解している	.762	.064	-.128	.602
	②介護対象者の過去の社会的立場や人間関係を理解している	.756	-.022	.002	.572
	③介護対象者の気持ちの変化を敏感に感じ取ることができる	.721	.168	.121	.562
	④介護対象者の視点で物事を考える	.717	.237	.127	.586
	⑤介護者としての自分の長所や短所についてよく理解している	.709	.185	.022	.538
	⑧言葉ではっきり言われなくても介護対象者のニーズを探り出すことができる	.691	.358	.109	.618
	⑥介護対象者が気持ちよく過ごすための工夫をしている	.635	.259	.163	.496
	⑦介護対象者との間に対立や問題が起こっても対処することができる	.613	.412	.14	.566
	⑨介護対象者のやる気を引き出すことができる	.611	.322	.232	.531
プラスの 感情維持 ( $\alpha = .738$ )	⑩ストレスの多い状況でもやる気を失わずにいれる	.257	.830	.065	.759
	⑪落ち込んでうまく立ち直ることができる	.142	.796	.098	.664
	⑫状況によっては自分の感情を抑えることができる	.428	.603	.175	.578
マイナスの 感情抑圧 ( $\alpha = .664$ )	⑬介護対象者の前では怒りやつらさなどの否定的な感情を隠す	.159	.283	.783	.719
	⑭心を感じていることとの違いを自覚しながら感情を表す	.009	-.112	.763	.595
	⑮いらいらしていても、心が穏やかであるふりをする	.089	.492	.663	.689
	固有値	4.62	2.62	1.84	
	寄与率 (%)	30.81	17.43	12.26	(60.50)

表6 重回帰分析で使用する変数の説明

独立変数	基本属性	性別	1. 女	0. 男	
		介護期間	1~480 か月		
		介護時の同別居	1. 同居	0. 別居	
	介護への 関与状況	関与の仕方	1. 主な介護者として関わった	0. 補助的に関わった	
介護内容		・身体的清拭	1. 行った	0. 行っていない	
援助態勢と 周囲の状況	配偶者の援助	1. あり	0. なし		
	配偶者以外の援助	1. あり	0. なし		
	パーソナルネットワーク数：・別居の親族	0~19 人			
	・友人	0~10 人			
介護状況	要介護者との介護以前の関係	1. 良い	0. 悪い		
	介護の心理的負担	1. 全く感じない	2. あまり感じない	3. 少し感じる	4. とても感じる
	ストレス解消の有無	1. ある	0. ない		
	介護の位置づけ	・精神的に苦痛である			
		1. そう思わない	2. あまりそう思わない	3. まあそう思う	4. そう思う
		・ものの考えを柔軟にしてくれる			
従属変数	感情労働評 価得点	理解対応得点	9~36 点		
		プラスの感情維持得点	3~12 点		
		マイナスの感情抑圧得点	3~12 点		

表7 重回帰分析

		標準偏回帰係数 ( $\beta$ )		
		理解対応	プラスの感情維持	マイナスの感情抑圧
基本属性	性別	.050	.061	-.025
	介護期間	.008	-.010	-.011
	介護時の同別居	.001	-.102	-.046
介護への関与状況	関与の仕方	.168*	.172*	-.011
	介護内容	.219**	.095	.165*
	・身体の清拭 ・食事の準備・後始末	.060	.170*	.146
援助態勢と周囲の状況	配偶者の援助	-.051	-.044	.023
	配偶者以外の援助	-.042	.026	-.003
	パーソナル・ネットワーク数	.220**	.032	.008
	・別居の親族	.050	.051	.018
	・友人 ・近所の人 ・職場の人	.009 .077	.026 .051	.036 .112
介護状況	要介護者との介護以前の関係	.115	.073	-.022
	介護の心理的負担	-.119	-.058	.146
	ストレス解消の有無	-.011	-.061	.027
	介護の位置づけ	-.040	-.079	-.002
	・精神的に苦痛である ・ものの考えを柔軟にしてくれる	.230***	.291**	.137*
重相関係数 (R)		.550***	.493***	.387**
決定係数 (R <sup>2</sup> )		.302	.243	.149
n		227	251	246

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05

ナル・ネットワーク数が多いほど、介護はものの考え方を柔軟にしてくれると考えているほど、理解対応得点が高い。

プラスの感情維持得点については、「関与の仕方」、「食事の準備・後始末」、「ものの考え方を柔軟にしてくれる」で有意な影響力が確認された。主に介護に関わっている方が、食事の準備や後始末をしている方が、介護はものの考え方を柔軟にしてくれると考えているほど、プラスの感情維持得点が高い。

マイナスの感情抑圧得点については、「身体の清拭」、「ものの考え方を柔軟にしてくれる」で有意な影響力が確認された。身体の清拭を行っている方が、介護はものの考え方を柔軟にしてくれると考えているほど、マイナスの感情抑圧得点が高い。

「ものの考え方を柔軟にしてくれる」は3つの感情労働評価得点に有意な影響を与えている。介護をプラスに位置づけていることが、感情労働評価に大きな影響を与えていることが明らかになった。

### ③一元配置の分散分析

重回帰分析では捉えられなかった要介護者との続

柄、要介護者との性別関係、サービスの利用状況と感情労働評価得点との関連をみるため、「感情労働評価得点」を従属変数として一元配置の分散分析を行った。以下がその結果である。

#### 1) 要介護者との続柄と感情労働評価得点との関連

女性では、いずれの感情労働評価得点においても有意差が確認されなかった。男性の場合、プラスの感情維持得点のみで有意差が確認され、「自分の父」よりも「自分の母」を介護した者の方がプラスの感情維持得点が高い (表8)。

また、女性についてのみ、自分の親と配偶者の親別に感情労働評価得点との関連をみた (表9)。

理解対応得点のみで有意差が確認され、「配偶者の親」を介護した者よりも「自分の親」を介護した者の方が、理解対応得点が高い。

#### 2) 要介護者との性別関係と感情労働評価得点との関連

介護者と要介護者の性別関係と感情労働評価得点

表8 要介護者との続柄と感情労働評価得点との関連

			n	平均値	SD	F 値
理解対応得点	女性	自分の父	25	29.0	5.33	1.95
		自分の母	64	29.8	4.80	
		配偶者の父	20	28.0	4.68	
		配偶者の母	64	27.8	5.00	
男性	自分の父	24	27.1	4.27	0.35	
	自分の母	52	27.8	5.46		
プラスの感情維持得点	女性	自分の父	29	9.3	1.94	0.54
		自分の母	77	9.2	1.98	
		配偶者の父	24	8.8	1.86	
		配偶者の母	73	8.9	1.73	
男性	自分の父	22	7.8	2.02	5.08*	
	自分の母	55	8.9	2.04		
マイナスの感情抑圧得点	女性	自分の父	29	8.6	1.94	0.10
		自分の母	72	8.5	2.30	
		配偶者の父	22	8.6	2.18	
		配偶者の母	75	8.7	1.80	
男性	自分の父	21	8.1	1.61	0.91	
	自分の母	54	8.0	2.22		

注) 男性の場合、配偶者の父母に関わったケースは少ないので、自分の父母のみの平均値を算出した。\* p<.05

表9 女性のみ：自分の親と配偶者の親別にみた感情労働評価得点との関連

		n	平均値	SD	F 値
理解対応得点	自分の親	89	29.6	4.94	5.32*
	配偶者の親	84	27.9	4.90	

\* p<.05

表10 要介護者との性別関係と感情労働評価得点との関連

		n	平均値	SD	F 値
理解対応得点	女性→女親	129	28.9	5.00	1.35
	女性→男親	44	28.4	4.98	
	男性→女親	62	27.9	5.59	
	男性→男親	29	26.9	4.38	
プラスの感情維持得点	女性→女親	151	9.07	1.86	3.73*
	女性→男親	52	9.06	1.91	
	男性→女親	65	9.03	2.08	
	男性→男親	28	7.75	2.40	
マイナスの感情抑圧得点	女性→女親	148	8.6	2.05	1.80
	女性→男親	50	8.6	2.03	
	男性→女親	65	8.1	2.16	
	男性→男親	28	7.9	1.76	

注) 矢印の左側は、介護者の性別 矢印の右側は、要介護者(親)の性別を表す。

\* p<.05 \*\* p<.01

との関連をみた(表10)。

プラスの感情維持得点のみで有意差が確認された。「男性→男親」(男性が男親を介護している場合)と他の3つのパターンとの間に有意差があり、男性が男親を介護している場合のプラスの感情維持得点が最も低い。

### 3) サービス利用状況と感情労働評価得点との関連

2000年以降に介護を行った者を対象として、男女別に、サービスの利用状況と感情労働評価得点との関連をみた(表11)。サービスについては、在宅介護の3本柱といわれる、訪問介護(ホームヘルパー)、

表11 訪問介護（ホームヘルパー）の利用状況と感情労働評価得点との関連

			n	平均値	SD	F 値
理解対応得点	女性	利用した	25	28.5	4.86	0.73
		利用しなかった	24	27.3	4.90	
	男性	利用した	41	29.1	5.20	0.02
		利用しなかった	52	28.9	5.15	
プラスの感情維持得点	女性	利用した	25	9.4	1.93	9.55**
		利用しなかった	26	7.5	2.34	
	男性	利用した	48	8.8	1.86	2.10
		利用しなかった	57	9.3	1.86	
マイナスの感情抑圧得点	女性	利用した	22	8.5	1.87	5.77*
		利用しなかった	26	7.1	2.09	
	男性	利用した	45	8.5	1.79	0.37
		利用しなかった	56	8.3	1.90	

\* p<.05 \*\* p<.01

デイサービス、ショートステイの利用状況についてみた。その結果、訪問介護の利用の有無において、女性のみ、プラスの感情維持得点とマイナスの感情抑圧得点で有意差が確認された。訪問介護を「利用した」者の方が「利用しなかった」者よりも、プラスの感情維持得点が高い。マイナスの感情抑圧得点も、同様に、訪問介護を「利用した」者の方が高くなっている。

## 7. まとめと考察

15の感情労働評価項目を因子分析した結果、「理解対応」「プラスの感情維持」「マイナスの感情抑圧」の3因子が抽出された。親の介護経験がある対象者の多くが回答した最的変数については重回帰分析、回答者数が少数になり、重回帰分析に投入できなかったカテゴリー変数については、一元配置の分散分析により、感情労働評価得点との関連をみた。

### (1) 重回帰分析について

3つの感情労働評価得点に影響している変数は、「親の介護はものの考え方を柔軟にしてくれる」である。プラス志向で親の介護にあたることで、感情労働評価得点を高めていることが示された。田中（2005）は、ヘルパーを対象にした調査において、ヘルパーのプラスの心理（満足、リラックス、冷静、

情熱、やる気）が4つの感情労働スキルのすべてと有意な正の相関があることを明らかにしている。本研究も同様の結果が確認された。

その他の変数の影響力について、注目すべき点について述べる。

- 「介護への関与の仕方」が補助的であるよりも主な介護者として関わっている方が、理解対応得点とプラスの感情維持得点ととも高い。主な介護者は、要介護者に対してさまざまなケアを行うとともに多くの時間をケアに当てることになる。こうした関わりの中で要介護者のことを理解し、ニーズに応じた対応ができるようになるのと共に、プラスの感情を維持することができるようになるのではないかと考える。
- 「身体の清拭」を行っている方が理解対応得点とマイナスの感情抑圧得点が高い。身体の清拭は要介護者の肌に触れる行為である。親密な関わりの中で、要介護者に対する理解を深め、ニーズに応じた対応ができるようになるのと同時に、否定的な感情を隠し、穏やかに対応するようになっていくのではないかと考える。
- 「別居の親族のパーソナル・ネットワーク数」が多いと理解対応得点が高い。別居親族とは、自分のきょうだいや配偶者のきょうだい、きょうだいの配偶者、子どもなどである。これらの別居親族からの情報や支援が、要介護者を理解

することにつながり、要介護者のニーズに応じた対応ができるようになるのではないかと考える。

## (2) 一元配置の分散分析について

注目すべき点は以下のことである。

- ・男性の場合、「自分の母」の介護をしている者の方が「自分の父」を介護している者よりもプラスの感情維持得点が高い。男性は、父親に対してやる気などのプラスの感情を維持することが、母親の場合よりも難しいことが明らかになった。また、女性では、「配偶者の親」よりも「自分の親」の介護をしている者の方が、理解対応得点が高い。女性は、配偶者の親よりも自分の親についての方が、生きてきた歴史や性格をよく理解している。こうしたことから、自分の親を介護している者の方が、よりニーズに応じた対応が可能になっていると考えられる。
- ・「介護者と要介護者との性別関係」について、男性が男親を介護している場合、他の性別組み合わせよりもプラスの感情維持得点が際立って低い。男性が男親を介護する場合、やる気を失わずにいたり、落ち込んでも立ち直るなどのプラスの感情を維持することが難しいことが明らかになった。本対象者の男性は50～70代で、女性に比べて、家事や子育てにかかわる機会が少なく、養護性（幼・弱・老者に気づき、援助する心と力）を培う機会を与えられずに育ってきた者が多い（柏木 2011）。介護におけるプラスの感情を維持することの困難性には、こうした事情も関連しているのではないかと考えられる。
- ・女性の場合、訪問介護（ホームヘルパー）を「利用した」者の方がプラスの感情維持得点とマイナスの感情抑圧得点が高い。女性が親の介護を在宅で行う場合、ホームヘルパーの利用がプラスの感情維持とマイナスの感情抑圧に関連しているという知見は注目に値する。ホームヘルパーを利用したことで、要介護者と介護者の二者関係ではなく、要介護者と介護者、ホームヘ

ルパーの三者関係になるため、より多くの情報が入り、人間関係が活性化される。また、ホームヘルパーの支援や励ましは要介護者と介護者の人間関係を柔軟にし、プラスの感情を維持することやマイナスの感情を抑圧することに好ましい影響を与える（木下 1989）。このように介護保険サービスをうまく活用し、外部資源を在宅介護に取り入れて親の介護にあたることは感情労働にとって有効であることが示された。

## (3) 結論と課題

親の介護を前向きに評価していることが介護における感情労働の遂行に大きな影響を与えていることが明らかになった。介護は体力を必要としたり、悩むことがあるなど身体的、精神的苦痛を伴う行為でもある。しかし、そのような介護を肯定的に捉え、アンビバレントな思いを抱きつつも、前向きに介護にあたることが要介護者を理解し、自分の感情を管理することに大きく影響していることがわかった。

パーソナル・ネットワーク数における別居の親族の人数が多いと要介護者を理解し、ニーズに応じた対応ができるようになってきていることが示された。パーソナル・ネットワーク数とは、日頃、何かと頼りにし、親しくしている人の人数のことである。親の介護の場合、特にきょうだいの援助やきょうだいの適切なかわりが重要である。親の介護が必要になる以前から、介護の主体的な担い手を検討したり、補助的な担い手の役割を確認し、良好な親族関係を築いておく必要があるだろう。

在宅介護においては、介護保険サービスの中でも特に訪問介護（ホームヘルパー）を活用することがプラスの感情を維持したり、マイナスの感情を抑圧することに良い影響を与え、効果が期待できる。在宅で介護にあたる場合、介護保険サービスを活用し、外部資源を要介護者と介護者の関係の中にうまく取り入れていくことが重要である。

男性が男親を介護している場合、他の性別組み合わせよりもプラスの感情を維持することが難しいことが明らかになった。厚生労働省の「高齢者虐待防止に関する調査」（2009）によると、被虐待者からみ

た虐待者の続柄は「息子」の割合が最も高く、次いで「夫」、「娘」の順になっている。この結果からも男性が介護することの難しさがわかる。本研究の調査結果から、男性の場合、やる気を失わずにいたり、落ち込んでも立ち直るなどプラスの感情を維持することが難しい状態にあることが、高齢者虐待の一因となっているのではないかと推測される。男性が男親の介護にあたる場合は、社会的サービスをうまく活用し、プラスの感情が維持できるようにサポートしていくことがより求められるのではないか。

本研究で明らかになった知見のうち、家庭科教育で取り組める点として、介護に対する前向きな位置づけと介護保険サービスの活用を挙げる。高等学校家庭科では、高齢者の心身の特徴や介護保険制度などについて学ぶ領域がある。多くの高齢者が生きがいをもって暮らしている現状を学んだり、高齢者施設で話し相手や見守りなどを体験することを通して、生徒たちは老いに対する理解を深め、介護を前向きに位置づけられるようになると考えられる。また、介護保険制度ではさまざまなサービスが受けられることや、その効果が期待できることを学び、必要となった時にサービスをうまく活用できるようにすることが重要だろう。

最後に、本研究の限界について述べる。感情労働評価は、介護者の評価が高まれば要介護者にも良い影響があると想定して作成されている。しかし、ホックシールドの感情労働の定義にある「相手（要介護者）の中に適切な精神状態が作り出せたか」どうかは把握されていない。家族間介護における感情労働の測定では、介護者の感情労働が要介護者の良好な精神状態を生み出せたかどうかを実際に尋ねて評価することは難しく、本研究では介護者の評価からみた感情労働の把握にとどまっていることを指摘しておきたい。

付記：本研究は平成 22-23 年度科学研究費補助金（課題番号 21500704「中年期における親のケアと家族関係につい

ての研究」研究代表者 長津美代子）により実施したものである。

#### 引用・参考文献

- ・長谷川美貴子 2008 「介護援助行為における感情労働の問題」『淑徳短期大学研究紀要』第 47 号, pp.117-134
- ・柏木恵子 2011 『親と子の愛情と戦略』講談社
- ・Hochschild, Arlie Russell 1983. *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. University of California Press 石川 准・室伏亜希訳 2000 『管理される心—感情が商品になるとき—』世界思想社
- ・片山由香里 2005 「看護師の感情労働測定尺度の開発」『日本看護科学会誌』Vol.25, No.2, pp.20-27
- ・木下康仁 1989 『老人ケアの社会学』医学書院
- ・厚生労働省 2009 「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果」
- ・厚生労働省 2010 「国民生活基礎調査」
- ・三橋 弘次 2006 「感情労働の再考察—介護職を一例として—」『ソシオロジ（社会学研究会）』51 巻, pp.35-51
- ・長津美代子 2009 『中年後期における夫婦関係とパーソナル・ネットワークに関する研究 平成 18~20 年度科学研究費補助金 基礎研究（C）研究成果報告書』
- ・長津美代子、小林由佳 2011 「中年期における親のケアと感情労働—5 ケースの事例調査を通しての分析—」『群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編』第 46 巻, pp.171-180
- ・二木 泉 2010 「認知症の介護は困難か—介護職員の行う感情労働に焦点をあてて—」『社会科学ジャーナル』69, pp.89-118
- ・西浦 功 2005 「ホームヘルパーのアイデンティティ構築の困難性—感情労働としての在宅介護—」『人間福祉研究』No.8, pp.43-54
- ・下夷美幸 2009 「家族支援対策規範論と制度論—介護保険制度を素材として—」『家族関係学』No.28, pp.33-41
- ・武井麻子 2006 『ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか』大和書房
- ・田中かず子 2005 「ケアワークの専門性—見えない労働「感情労働」を中心に—」『女性労働研究』No.47, pp.80-91
- ・田中かず子 2008 「介護と「感情労働」—「見えない労働」に正当な評価を—」『女も男も』No.111, pp.18-23
- ・上野千鶴子 1990 『家長長制と資本制：マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店